

風を起こす <第19回>

人の役に立つために
役人として何ができるか

羽昨市農林水産課ふるさと振興係

高野 誠鮮さん

「ローマ法王に米を献上した公務員」と言えばご存じの方も多いだろうが、**「限界集落を救った公務員」と言ったほうがいいだろうか。**はたまた**「UFOによるまちおこしの仕掛人」としての印象をお持ちの方もいるだろう。**いずれにしても、その活躍ぶりはテレビや雑誌で取り上げられ、各地の講演会でも引つ張り風である。羽昨市職員、高野誠鮮さん。その姿を追った。



誠に失礼ながら、取材直前まで私は心の中で疑っていた。**「能登半島の小さな町でUFOだつて？ ローマ法王に米を献上しただつて？」**いかにも眉唾物ではないか

ウィキペディアで調べるとこう書かれていた——高野誠鮮は限界集落を蘇らせたスーパー公務員と言われている。科学ジャーナリストで、日蓮宗僧侶・金沢大学理学部大学院等の講師も務める——公務員でこんな肩書きを持った人なんて聞いたことがない。きつと裏があるに違いない

予算60万円で限界集落を脱却

羽昨市農林水産課ふるさと振興係。ひっそりなしに訪れる全国からの視察やさまざまな問い合わせを、正規職員と臨時職員の2名で対応する。その日も三重県のある町の議員十数名がマイクロバスで視察に訪れていた。視察と言ってもタダではない。ここでは

有料で視察研修を受け付けている。資料代を含め5名以下は5000円、1名を超えると10000円加算、10名なら1万円

[たかの じょうせん]

1955年、石川県羽昨市出身。1984年、羽昨市役所に入庁、UFOでまちづくりを開始。1996年、宇宙博物館「コスモアイル羽昨」が開館。2005年、農林水産課にて農山漁村活性化計画に着手。同年、ローマ法王に神子原米を献上。2008年より総務省の「地域力創造アドバイザー」も務める。著書に『ローマ法王に米を食べさせた男』（2012年、講談社）、訳書に『UFO軍事交戦録』（1992年、徳間書店）などがある。

の計算だ。

午後1時の開始を前に到着した町議会の面々は、神子原地区にある手打ち蕎麦屋で食事を済ませ、隣接する神子原公民館に入った。

〃神子原地区は市内で最も過疎化が進んでいた地域です。高齢化率54%。1000人を超えていた人口は15年間で半減しました。この公民館も元は小学校でしたが、過疎化により廃校になりました。18年間、子どもは1人も生まれていません〃

菌切れよく語られる高野さんの説明に視



棚田が美しい神子原地区

察者たちは真剣な表情で聞き入る。本日のテーマは〃過疎限界集落からの脱却!〃。

多くの自治体が抱える過疎化の問題。特に深刻な限界集落の対策に、どこも頭を悩ませている。そんな中〃たった4年〃で、しかも〃予算60万円〃で限界集落から脱却したとあらば、秘策を教えてほしいと請うのは当然のことだろう。

〃自治体の中には、限界集落になった地区を元の姿に戻すことをあきらめたところもあります。山に住む人を平野部に移住させる。これは害虫駆除的な発想です。ですが、私は元の姿に戻そうと考えました。

集落にとって、人体の血に相当するものはお金です。そこで神子原地区の農家の平均年収を調べてみると、わずか87万円でした。これじゃあ、普通の生活は望めない。若者が喜んで行くかといえば、行かないです。なぜ年収が低いのか。自分でつくったもの自分で値段がつけれないんですね。1本100円かけてつくった大根が、出荷したら30円だと言われる。市場が値段を決めている。だったら、自分で希望小売価格を最初からつけばいい〃

視察者たちは高野さんの話に一層、身を乗り出した。

〃米をブランド化するため、私はまず、量より質で勝負するための裏付けが必要だと考えました〃

そこで使ったのがなんと人工衛星。田んぼに実った米の食味を人工衛星を使って分

析し、5段階のうち上位3段階を高級米とした。これらを〃神子原米〃として認定し、パッケージロゴはエルメスでもデザイナーを務めた書道家に書いてもらった。

〃次に考えたのが、この米を誰に食べてもらえれば最も影響力があるかということです〃地名の〃神子〃にちなんでローマ法王へ手紙を送り、米を毎年献上する運びとなるわけだが、ダメもとのチャレンジは功を奏し、富裕層からの注文が相次いだ。

〃お陰で1俵1万3000円だった米は4万2000円と3倍に跳ね上がり、わずか1カ月で完売しました〃

視察者の心をわしづかみにして、高野さんは限界集落を立て直すために取った行動と、その理念を次々に紹介した——地元住民に役所の本気度を示すために開催した〃大学とのタウンミーティング〃、都市住民を集落の人たちが面接試験で選んだ〃空き農家の活用〃、報道発表をAP通信やロイター通信に流しイギリスの領事館員の関心も引いた〃お米のオーナー制度〃。伝統文化にヒントを得た〃烏帽子親農家制度〃では、毎年大学生を呼び込み、その大学生がつくった棚田の巨大な雛人形を見ようと、過疎の村に1500人もの観光客が押し寄せた。

プロジェクトの開始から4年、高齢化率は何とか47・5%まで改善しました。今では年収700万を超える農家も出てきています〃

視察者たちから感嘆の声がもれた。

“コスモアイル羽咋”の玄関を飾る
“マーキュリー・レッドストーン・ロ
ケット”。1段目、2段目は実物



できない理由を探さない

次男だった高野さんが、実家の妙法寺を継ぐべく故郷に戻ったのは29歳のとき。大学在学中から始めた科学雑誌の執筆とテレビの構成作家の仕事をあきらめて東京を後にした。これといった産業もない地元で、お寺の収入だけでは食べていくことができず、市の臨時職員として採用され、35歳で正規職員になった。

活気の失われた地域を活性化させたいと、最初に取り組んだのはUFOによるまちおこし。地元には伝わる古文書にUFOらしきものの記述を見つけ、まちおこしの種にしようと呼びかけた。観光の目玉は宇宙科学博物館「コスモアイル羽咋」の創設。

JR羽咋駅からほど近い「コスモアイル

羽咋」を実際に見学してみても、私は心底驚いた。これほどすごいものが、なぜ展示できなんだ？」

アメリカ製の月面車はアポロ計画の実験用として開発された試作機、旧ソ連製の通信衛星モルニャはバックアップ機、同じ旧ソ連製のヴォストーク有人帰還カプセルは大気圏再突入で燃えた跡も生々しい実機。つまり、これらはすべて模型ではなく、本物ののだ。

アポロ宇宙船最後の船長が日本の子どもたちに向けて書いた手紙の宛名はMr. TAKANO、スタンフォード大学教授など世界的UFO研究者32名によるビデオメッセージは全員が“Welcome to Hakui Cosmo Museum”で語り始める。

これほどの物を集めれば当然、莫大な費用が掛かると思いきや、展示については内装もすべて含め2億円で済んだという。

「3カ月間の渡米で、NASAをはじめ11カ所を回り、宇宙器材が地面にころがっている場所を見つけて、直接交渉しました」

と高野さんはいとも簡単に話すが、NASAともあろうところに誰もが入れるわけがない。高野さんは、前職で培った人脈をフルに活用した。

「コスモアイル羽咋」開設にあたっては、当初、博物館等の展示空間の企画・設計を専門とする会社に委託予定だった。だが、専門会社に高野さんが希望を伝えると、実現不可との回答を受けた。

「だったら、自分たちでやってやろうじゃないかと思っただけのことです」

「できない理由を探さない。頭の中で考えたことを、どうやったら現実化できるかを一生懸命考える。それが高野さんのスタンスだ。」「私たちに必要なのは行動すること。電球が切れているなら、新しい電球に替えればいい。不平を言う人は山ほどいますが、言っているだけでは明るくなりません。公務員は新しい電球をもつて、はしごを架け、電球を替えればいいだけのことです」

「いないと困る公務員」たれ

2005年、農林水産課に異動した高野さんは限界集落対策に着手するにあたり、市長はじめ上層部がそろった予算ヒアリングの場で、プロジェクトについて事前の稟議はしないと申し出、了承された。

「玄関先で倒れているおばあちゃんを助けるのに、稟議はいらないでしょう？」

事前稟議なしの事後報告に加え、高野さんはプロジェクトの計画書も基本的に紙1枚。「コンサルティング会社に高いお金を払って計画書をつくってもらっても、社会は紙のとおり動いてくれません。計画書をどれほど書いてもまちは変わらない。計画書では、こういうまちをつくりたいという心の方向性さえ相手に伝えられればいいのです」

理念に裏打ちされた行動は必要だが、理念だけで行動が無ければどうしようもない。



旧ソ連製の
“ヴォストーク帰還用宇宙カプセル”

「マイナス思考の人はいつも、失敗したらどうするんだと言うばかり。ダメな公務員は石橋を叩き過ぎて壊してしまっています。上司の顔色だけを見て、現場を見ていないし、地域を見ていない」

そんな公務員ばかり増えたら日本はダメになると、高野さんは強い危機感を持っている。曰く、公務員には3種類いる。いてもらっては困る公務員、いなくともいい公務員、いないと困る公務員——5万円の仕事しかしていないのに50万円もらっている公務員がいては困るのだ。

歯に衣着せない高野さんを、快く思わない人もいる。核心をついた指摘で相手を怒らせてしまったことも一度や二度ではない。だが、本当に地域や住民のことを考えている相手であれば、高野さんの信念に心動かされる。最初は敵だった相手が、いつしか最強のパートナー、最大の理解者になつてくれたことも多い。

農林水産課に異動したとき、上司が言ってくれた言葉がある——「犯罪以外は私が全部責任を取るから、やりたいようにやりなさい」。

「池田課長の言葉は、心の琴線にふれました。そして、何でもやってやろうと」

失敗したらどうするん

だ、議会で攻められたらどう責任を取るんだと言うこともなく、部下を全面的に信じて可能性に懸けてくれた上司に心を突き動かされ、高野さんは最大限の力を発揮した。一旦限界集落に陥ると、人口の回復は見込めない。という学者の言葉をはねのけ、神子原地区には他県から12家族35名が移り住み、昨年には若い夫婦に新しい命も誕生した。

臨終のときにわかる、人間の価値

「人ができないと思うことを実現できたときは本当にうれしいですし、どうせ誰かが裏でやっているんだろう？」と思われるようなことを自力でやってのけたところに、仕事の醍醐味があります。だから、私は仕事が楽しくて仕方ありません」

数々の偉業を成し遂げてきた高野さんの目には、公務員にアントレプレナー、すなわち起業家の精神が足りないことも気がかりだ。これからの時代、公務員といえども、いやむしろ公務員だからこそ、失敗を恐れず果敢にチャレンジしていかなければ、地域もろとも生き残っていけないのかもしれない。

「目標を達成するための方法は1つだけ用意していてもダメです。最低3つは用意しておかないと。雑草はなぜ抜けないかと言えば、いくつも根を張っているから抜けないのです」役に立つから「役人」のはずが、今の役

人は地域社会の役に立っていないのではない

かとも警鐘を鳴らす。

「役人は自分を捨てて、地域社会のために懸けてこそ、初めて価値が出てきます。保身を考えた時点で、価値はなくなってしまう」確かに、かつての日本には、自分を捨て、私欲を捨て、国のため地域のため他人のためにと汗水を流して働いてきた人々が数多くいた。そんな気概や魂が、今の日本に一体どれほど残っているのだろうか。

「仏法を学ぶ前にまず臨終のことを学べという言葉があるのですが、人間の価値は死を迎えるときに初めてわかります」

自分のために生きれば1×1で1の価値、1×家族だと家族の分、1×会社だと会社の分、世界平和のために人生を懸ければその分の価値があったということです」

原点に立ち返ったとき、高野さんはいつも自らに問い掛ける。私は人の役に立っているか？ 臨終のとき、どれだけの価値があるだろうか？

高野さんは現在、本当に安心で安全な完全無農薬・無肥料農産物を作り出すことに尽力し、その考えに賛同する人の輪は少しずつ広がっている。特に20代、30代の若者たちの中には、高野さんの人柄にひかれ、生き様にあこがれる人も少なくない。私もその一人です。と臨時職員の方がそつと教えてくれた。地域にとって、既に高野さんの価値が計り知れないものになっていることは間違いない。

(協会職員／篠田良子)